

時空間と存在への問い

イニスとハイデガー、あるいは「メディアの原理論」への前哨

水島久光

Questions of space-time and being

H. Innis and M. Heidegger, or an outpost to the 'media principle'.

MIZUSHIMA Hisamitsu

Abstract

There is no principle theory of media studies. This is because the frames of media studies have been set up like a patchwork, ad hoc, according to the demands of the times. The development of digitalisation has brought to light the fragility of the theory. This paper proposes what attitude theoretical research should adopt in response to this situation. Specifically, it proposes the overlap between Harold A. Innis's and Martin Heidegger's approaches to 'time' and 'space' as a clue to understanding the universality and historical constraints of theory. The project will confirm the commonalities between the two men who, in the first half of the 20th century, raised them as explanatory variables for their respective concerns, and will explore the universality of the "question of being" and the "disappearance of the media" as hypotheses for the next generation.

1. 技術の問いの現在－NHK 技研公開 2022 より

2022年5月26日から29日の四日間、NHK放送技術研究所は「技研公開2022」を開催した。コロナ禍の影響でリアル開催は三年ぶりだ。展示の多くは「手の届く未来」に軸足をおいたメディアとコミュニケーションに関わる要素技術である。それをどのように文脈化するか、いかなる括りのもとに提示するかは、「放送」という概念に対するNHKの「自意識」の解釈につながる点で、放送研究上欠かせないイベントとして、これまでも注目しつづけてきた。

3年のブランクがあったからかもしれない。言葉を選ばずに表現するなら、今回目撃したのは、ついに「放送」がインフォメーション・テクノロジーの海に溶解した世界だった。大局的な物言いをするならば、地上波のデジタル化以降「放送」は、自らの存在を問い続ける運命と戦っていた。2005年以降、毎年筆者はこの展示の定点観測を続けてきたが、実際、事業者と

してのNHKの自己解釈は「行きつ戻りつ」を繰り返していたように映っていた¹。「放送と通信の融合」のスローガンが膾炙する中でヘゲモニーの重心移動は、言い換えれば、技術にいかなる意味を与えうるかをめぐる攻防のあらわれに見えたのである。

まさにその水際は、要素技術をどんなカテゴリーにまとめ文脈化するかに表れる。NHKはそれをこれまで3年ごとの中期計画で示してきた。2022年は、昨年からの期の二年目ではあるが、コロナ禍で二年間会場展示ができなかったこともあり、初めてそのコンセプトに対応する技術との関係を目にする機会となった。

2015～17年の中期計画では、カテゴリーは明確ではなく、核を担う技術群が展示分類を構成していた——その中でも「ハイブリッド・キャスト」すなわちインターネット連携サービスがやや後景に退き、オリンピックへの期待に後押しされて「スーパーハイビジョン」の展示コーナーを拡大させたのは印象的であった。この時期の放送には、技術的存在感を示すことで「メディア融合」時代の先導者たらんという自負があった。ところが2018～20年の中期計画においてそれは変わる。「スマートプロダクション」「コネクテッドメディア」「リアリティイメージ」の三つのカテゴリーには、その前期に見られた「強い放送」への拘りはなく、技術をフラットに捉え、バックエンド～フロントエンドの層別にクールに分類する姿勢が表れていた²。

そして今期（2021～23年）のカテゴリーには、さらに大きな変化があった。これまでも例外的に扱われていた「次世代技術」を除けば、「イマーシブメディア」と「ユニバーサルサービス」の二つに大胆に整理されたのだ。「没入（immersive）」と「普遍（universal）」——これらはもはや、「何を作っている」を表すものではなく「どこを目指しているのか」をダイレクトに語っている。しかも前者にはかつての四番バッターであった大画面ディスプレイはなく、後者には障害者を念頭においたバリアフリー技術よりも個人情報に紐づいたシステムボーダーのないスムーズなアクセスが目標に設定されている。この二つは異なる次元のコンセプトに見えて、実は同じ方向を向いている——それは、インターフェイスの無意識化、もっと極論すれば「メディア」の輪郭を捉える知覚の消失（あるいはメディアと日常の境界線の消失）である。

ここ数年で完全に、メディア界のヘゲモニーを掌握するに至った通信サービスは、今やメタヴァースとパーソナライズの国際潮流の中にあり、その課題の底には、既に放送と通信の間に線を引くことはできないという現実が見え隠れしている³。どこにもない空間を創造しようとする営みと、個人の存在をデータに解体する処理は、実は表裏一体の技術的にはコインの両面の関係にある——その本質は「技術によって人の認識は任意に組み替え可能である」というロジックに支えられており、これは少なくとも10年以上前の、マスメディアの業種（技術）分類ごとに縦割りとなったコミュニケーション過程、およびそれごとに閉じた研究領域が成り立つとしてきた「メディア研究の約束事」とは、激しく矛盾する事態であるといえる。

この深刻さを受け止める理論を、残念ながら我々は持ち合わせていない。そもそもこの事態をどのレベルの変化とみなすかも、見解の共有は得られていない——パラダイム・チェンジと見るか、それとも我々が語るべき対象としてきた「メディア」なる枠組みが、わずか過去100年の歴史状況が生んだ特殊な現象形態に過ぎないのか——本質的な議論がはじまる気配のないまま、学問そのものが時代の欲求に飲み込まれる様相を、傍観しているような日々が続いてい

る。「メディア研究」の無力からの脱出口はどこにあるのだろうか——もしかするとその手掛かりは、当たり前のように「メディア論」として扱われてきたテキストにあるのかもしれない。

2. 「メディア論の嚆矢」か？——マクルーハンとハロルド・イニスの関係

メディア概念の成立

20世紀が「メディアの時代」としてかたち作られるに至ったその契機は、技術にある。しかし、そのことに人々が気づくようになるには、ずいぶんと多くの議論を要した。マスメディアの産業化とジャーナリズム的な倫理観が先導するかたち（ガブリエル・タルドからウォルター・リップマンに至る論考）で、「世論」という社会現象が新聞の機能分析と結びつき、「学問」の体裁は整っていったが⁴、当初それは、文字と印刷という技術カテゴリーに閉じたものであり、のちに（1986年に）フリードリヒ・キッラーが「感性を直接記録する」装置を射程に収め、それを文字と印刷表現との関係において論じるようになるまで（『グラモフォン・フィルム・タイプライター』）、それらを一つの大きな地平の上に並記しうる対象とみなすことはほぼなかった——マーシャル・マクルーハンとカルチュラル・スタディーズの人々の仕事を除いて⁵。

彼らを、いわゆる「メディア論」の嚆矢とする学説史は今や一般的である。しかし、その関心はいずれも先行するニュー・クリティシズム（マクルーハン）やマルクス主義社会学（カルチュラル・スタディーズ）の思潮に導かれたものであり、彼らと「メディア」との出会い、その眼差しの拡張によって、視界に入って来た偶然の結果にすぎない。特にマクルーハンについては、「メディアはメッセージである」「ホット/クール」「グローバル・ヴィレッジ」「空間と時間の消滅」など次々キャッチーなテーゼを提出したことにも表れているように、「メディア」概念は目的であるというより手段であった——穿った見方をするなら、「メディア的なタレント」としてのセルフ・プロデュースの一環であったとすらみる向きもある。

それでも本論では敢えて一旦、マクルーハンの言説は「理論として」の吟味の対象足り得るものという態度をとることにしたい——それは、彼以前は「媒介」という一般名詞に過ぎなかったメディアという語に、「(実体化した=かたちをもった) 視覚的に捉えられるカテゴリー」のフレームを提案した点においてである。しかし既に述べてきたように、今日の我々が直面している事態は、その輪郭が曖昧になってしまった現実である——それは「融合」のイメージを超え、平面的に（レイヤー次元で）混ざりあうのに止まらず、いわば我々の「メディア」に対する共通認識を成立させていた「送り手/受け手」関係や、表象される「面」と認識主体たる我々の「距離」までを無効化する勢いで、進んでいるのだ。

マクルーハンによるイニス批判

だとするならば、我々はマクルーハンが提案した「メディア」概念の歴史的な有効性について、改めて検討する必要があるだろう——その出発点は、ハロルド・A・イニスとマクルーハンとの関係に関する言説が手掛かりとなる⁶。イニスの晩年、トロント大学の同僚でもあったマ

クルーハンは、彼自身の言葉でその影響を確かに告白している（『メディアの文明史』序文）。しかしそこには、後年「教科書」的に受け入れられた、マクルーハンをイニスの理論継承者として位置づけるコンテクストとは、やや異なる印象がうかがえる。マクルーハンはむしろイニスにポジティブな評価を示すよりも、いくつかの誤りや無見識をあげすげに指摘する「批判者」の態度で臨んでいるのである（p.13）⁷。

その結果、マクルーハンがイニスが構想した「コミュニケーション史」の要諦を二つの点で捉え損なっているように見える。確かに彼はイニスが「歴史的状況を、技術の性格が文化の具体化の中で検証されるための実験室として利用する」（p.11）方法を発見したとし、「筆記的形態と口頭的文化の相互作用」、特にそこに関わる媒体の物質性と文字、すなわちコミュニケーション内容の関係性に注目したことを評価する。しかしマクルーハンの関心はあくまで現象面にあり、背景にあるその原理的カテゴリーには十分に目が届かない。そして逆に彼が強調する「機械」と新たな「電気」的技術との違いにイニスは気づいていないと批判するのだ——だがそれは、イニスを持論に都合よく「切り取って」いることにはならないだろうか。むしろ今日我々が、イニスに積極的に読みに行かねばならないのはそこではなく、マクルーハンが「捨てた」部分にあるのではないか——特に彼が「イニスの誤読」と一刀両断にした「時間」と「空間」の関係を論じるアプローチは、その後のマクルーハンの射程には収まり切れないスケールのものである⁸。というも、まさにイニスはここで「時間と空間」の相互作用に注目したからこそ、『メディアの文明史』という著作は成立したのであり、その古代エジプトから現代に至る「通史」としてコミュニケーションによる政治経済史を記述するという試みは、その方法固有の限界を抱えることになった（新しい時代——ラジオの位置づけに苦しんだ）のである⁹。

晩年のイニスの三部作の（『帝国とコミュニケーション』『メディアの文明史』につづく）最後の一冊のタイトルが“*Changing Concepts of Time*”であることにも、その「相互作用」への関心は表れている。しかし同書では「通史」的関心よりも、近現代の英米、カナダの状況が焦点化される——残念ながらイニスは発行に間に合わずこの世を去った。したがって実際に「時間」に関する概念的考察——いったい時間の何が **Change** したのか——には到達できぬままに終わる。イニスは序文において、「19世紀の知識人は、時間的に絶対的な無価値へ向かう最初の人々であった。現実的で、しつこく、複雑で、人間の行動の分野における実用的な予見を短縮して与える独立したシステムとして扱われるそれらは、公共政策の最も脆弱な領域に浸透している」（筆者訳）と変化を描写するが、それ以上の知見をここに読み取ることはできない。

そもそも『メディアの文明史』の主題は、「メディア」よりも「コミュニケーション」という社会的行為の傾向性にあり、そこにはマクルーハンの観点で、様々な人工物における「メディア性」を独立した事象として「取り出す」意図はなかったように思われる¹⁰。一方マクルーハンが当時強くアピールした「神経系」のメタファーも、新聞の時代からラジオを介してテレビにヘゲモニーが移行する時代には一定の説得力があったかに見えたが、今日はいささか「賞味期限切れ」感は否めない。やや引いた眼で見るとすれば、それ自体がアナログからデジタルへの記号系のシフトを表象した、特殊な一時代の「痕跡」だったのかもしれない。

未完成ながらイニスには、所謂「メディア論」には回収されない「普遍」の視座があった。

しかしその仮説を演繹してみせるためには、これまでのフレームでは素材が不足しすぎている。そこで本論では、その欠けたピースを思い切って「普遍」を論じる別のフィールドに探し求め、概念の照合を図る冒険に出ることにしたい——それは同時代人、マルティン・ハイデガーの巨大な哲学の論理構成に、イニスの「通史」を添わせてみる試みである¹¹。

3. イニスとハイデガー——「時間と空間の綱目」

徐々に見出される「時間と空間」

イニスは『メディアの文明史』(*The Bias of Communication*)のまえがきで、以下のように一連の掲載論考(多くは講演原稿)を貫く前提認識を示している——「私の仮定するところでは、歴史とは縫い目のない織物ではなく、むしろその縦糸と横糸が時間と空間であり、それらがまったく一様ではない仕方で折り合わされて歪んだ模様を生み出す織物である」。そして加えて彼は、これらの論考群自体が「時代の特徴としてみずから描き出そうと努めているところの不安定の産物」とへり下ってみせる(p.21-22)。

イニスはこの著作で、彼の研究者としての前半生の政治経済学領域の業績を下敷きにしつつも、そこからの大胆な飛躍を企図している。そこには、国家や宗教による「支配」というコンセプトが通底し、同時代に広がったウェーバー的理解社会学の影響下にあるようにも見えるが、読み進めていくと奇妙なことに気づく。第一論考「ミネルヴァの梟」から第二、第三、第四論考に至るまで、内容的には同じように古代エジプトから現代までの「通史」が繰り返されているのだ。しかし、その一見冗長な記述を重ねる中に、我々は段階的かつ帰納的に原理的関心が発掘されていくさまを見出すことができる¹²。それは時期の異なる講演原稿であることを念頭におかなければ気づかないことだ(むしろ、なぜ同じことを繰り返し書いているのかとの印象を受ける)。しかもその変化で注目すべきは、当初第一論考において顕著であった「口承の融通性と書字の硬直性の対比」による「唯物史観」的構想から、「コミュニケーションの傾向性」へ、そして「時間」と「空間」へと説明変数が入れ替わってしていくことにある。

しかし自ら推論を重ねることによって転換、到達したこの「時間」「空間」の観念は、それ自体は十分に吟味されておらず——「時間は循環によって進み、円形をなしている。空間は四角形をなしている」(同著、p.123)「西洋文明においては安定した社会は空間概念と時間概念とのあいだの適度なバランスを正しく認識することにかかっている」(p.126)のように着想の域を脱していない。

イニスは慎重に、政治経済学的関心に回収されないように、「空間≒領土」「時間≒持続」に単純化させることを避け、その発見に至った相互性と力学を論じようともがくが、残念ながらその核心に届かず生涯を終える。だが読む者は、同一主題の論考が繰り返される中で手掛かりを掴むことができる——「序文」で批判したマクルーハンも気づいたことだが、イニス自身もラジオの出現で人類が直面した大きな変化を「時間の断片化」と捉え、そこに「歴史の断線」を見ていたのだ。そうなると、新たな説明変数たる「時間」「空間」は、実証科学的眼差しを超

えるフレームで概念化する必要に迫られる。実は『メディアの文明史』の邦訳者である久保秀幹は「文庫版訳者あとがき」でその予感を仄めかしている——（この議論の中に前提とされる）『私』とはすぐれて『コミュニケーション—内—存在』なのではないか（p.431）——久保は、暗黙裡に、イニスにハイデガーを重ね合わせている。

「使える」ハイデガー『存在と時間』からの脱却

実際、メディアやコミュニケーションに関する現象の説明に、ハイデガーを援用する試みについては枚挙の暇がない。だが——残念なことに、その多くはやはり「都合よく切り取り」持論に「引水」しているように見える。雑駁な分け方になるが、よく目につくものとしてはまず（1）時間概念の多層性、次いで（2）技術論（その本質としての集立性）に着目したものがある。そしてさらに（3）「世界—内—存在」という独特の表現を、近年のデジタル技術によるメディアの環境化に重ねて論じるものが挙げられよう¹³。

こうした「使える」ハイデガーへの安易な接近に共通する点は、彼の思想の全体像への関心と、想像力の欠如である¹⁴——理論研究者の欲望には二つのタイプがある。目の前にある対象現象に内在し、メカニズムを精緻に説明したいというものと、俯瞰の視座を極めんがために、より大きなパラダイムを志向するものと。しかしここで、一方を他方の「道具」に貶めることを慎重に避けようとするならば、後者が生み出す概念を、いきなり前者のアクチュアルな地平においてはいけない。その点で言えば、久保の眩きは（どの程度自覚的かはさておき）、「コミュニケーション」と「世界」のパラディグマティックな関係を指摘する重要性をもつ。

「〇〇—内—存在」という構図で、「世界」を「コミュニケーション」に置換しうる妥当性というためには、『存在と時間』の議論に立ち戻る必要がある。それはハイデガーにとって「世界」が、日常的なボキャブラリーにおける具象的「空間」の範列に属す語ではなく、「現—存在」(Da-sein)というハイデガーの哲学のまさに中核であるところの概念そのもの(SZ:53)の展開に求められるからだ¹⁵。まさにここを出発点にすることで、（1）～（3）に見られるご都合主義的切り取り、すなわちデジタル技術によって不安定となった認識や「メディア」の媒介性、あるいはその「実体」論的な演繹が可能であるかのような錯覚に、現象学のお墨付きを与えてくれそうなショートカットの誘惑を退けることができる。

言うまでもなく、ハイデガーの主著といわれる『存在と時間』は、「あらゆる存在了解一般を可能にする地平として時間を解釈する」¹⁶ことをその目標としている。したがってそこにおける「空間」と「時間」の関係は決してオープンではなく、また「実体」として向き合うべき対象でもない。そのことは翻って、「存在論」「實在論」自体を遡及的に捉え直すものと考えれば、ジャック・デリダがまさに言うように「<存在>の問いを目指して導かれる【文字通りに言えば：存在の問いを導きの糸とする】解体」作業ということができる（デリダ、p.21）。

だが往々にして、この肝心かなめの部分が捉え損なわれてしまう。その理由は、『存在と時間』の未完成さと、その構造によるところにある——1927年に刊行された第一部第二篇までは、この本の全体構想（「序論」第八節で示される）の中ではまだ「準備作業」にすぎないからだ¹⁷。まさしくマイケル・ゲルヴェンが指摘するように、第二篇第三章「現存在の本来的な全

体存在可能と、関心の存在論的意味としての時間性」と第四章「時間性と日常性」（第六三節～七一節）に至って、『存在と時間』全体の中心問題である「現存在としての人間が『在る』ということとはつねに『時間的に在る』こと」（ゲルヴェン、p.358）を説明する分厚い記述に出会い、その核心はようやく見えて来るものなのだ。兎にも角にも、この回りくどさが理解の邪魔をする¹⁸。

だからこここで、前半に示された「世界—内—存在」の「世界」概念の読み直しが必要となるのである。「世界は客体的に存在するのでも用具的に存在するのでもなく、時間性において時熟するのである」（SZ：365）「世界—内—存在の時間性は、同時に、現存在の特殊な空間性の基礎であることが判明する」（SZ：335）——すなわち、アプリアリに人間の「外」に置かれた実体的空間ではなく、時間＝とりわけ＜現＞の瞬間によって生成される形式的な観念として措定されているのである。ここを誤ってダイレクトに日常的な「世界」の解釈に接続してしまうと、思わず便利に「使える」気になってしまう罠にはまるのだ——そして同様に、「技術（2）」も「時間（1）」も分断され、各々の日常的ボキャブラリーに引き寄せられる。

構図的に見れば、「世界」はまさに根拠たる＜現—存在＞において、その時間性が起点となって織りなされた関係を表す「現象」であり（「技術」はそれを構成するものと位置づけられ）、むしろ見かけの空間性は結果として与えられるものとなろう。その観点から言えば、『存在と時間』からの理解をマッピングしようとするとき、「世界」の対に置くべきは「歴史」ということになる。時間をその諸様相において掘り下げた第二篇第三～四章に続き、ハイデガーは第五章においてその時間がいかに「歴史化」するかという問題に着手する。デリダは、この「世界」に始まり「歴史」に到達する『存在と時間』の既刊部分の構成を踏まえて「歴史は、ハイデガーがそのなかでこれを理解している意味において、存在の問いといかなる関係があるのだろうか、という問い」（デリダ、p.46）を立て示す。

ここまで来れば、ハイデガーをイニスに重ねる意味が明らかになるであろう。デリダは、『存在と時間』の冒頭第六節において、早々にその問題提起が示されていると指摘するが（デリダ、p.134-5）、ここにおける「歴史という概念の二つの意味の手前への還元または逆行」——①「世界史（あるいは世界の歴史）」言い換えれば、世界という概念と歴史という概念がどのように互いに支え合ってきたのかと、②「歴史学」の学問としての硬直性への批判こそが、まさに二人の同時代人のモチベーションの交点にあることを知ることができるからである。

ハイデガーは『存在と時間』既刊部分の最後から二つ目の節（第八二節）でヘーゲル批判を展開する。またイニスも『メディアの文明史』の第一章でヘーゲルを引き、ミネルヴァの鼻の「エネルギーの消耗」（p.72）を説く。その重なり気づいたとき、近代を支えてきた思惟そのものを再考すべき対象と見定めた二人の仕事の響き合いを、推理せずにはいられなくなる。

4. 開示と脱自態—歴史と世界の機能（世界と世界像）

「時間」と「空間」の緊張関係

かくしてイニスの仕事のハイデガーとの照合は、両者が互いの分野からの逸脱を決意したところに見出された説明変数——「時間」と「空間」の概念に向き合い続ける道となる。その展望は、ハイデガーにおいては「世界」を通俗性・日常的解釈から解き、「歴史」へとスライドさせることによって、徐々に拓かれはじめる。しかし、イニスの経済史的でマクロなパースペクティブはとともそこには至らない。イニスの現実に注ぐ目とハイデガーのミクロな「存在への問い」の間には、容易ならざる距離と解像度の差がある——だが逆に、ここを詰めていく作業の先に、「メディア」の問いへ接近していく道が見える、と考えてみたらどうなのだろうか。

そこで再びイニスの「時間は循環によって進み、円形をなしている。空間は四角形をなしている」（イニス、p.123）のテーゼに戻ってみよう。循環性、円環性——あえて、このイニスの指摘は、ハイデガーが言うところの通俗的・日常的な了解の中における認識のレベルにあると考えた場合——もしかするとそれは単に、時計をイメージするような視覚的メタファーにすぎないかもしれないとしても——ハイデガーが時間性を方法的基底に据え、その循環性を受け入れることを訴えるとき（ゲルヴェン、p.363-369）、翻ってそれは「現存在に本質的にそなわっている投企のはたらき」（SZ：315）を浮かびあがらせることに繋がるのではないだろうか¹⁹。

一方、「空間は四角形をなしている」についても、地図に表される通俗的なイメージに依拠しているだろうことは想定できるが、前後への直線的延長をその本質とする時間のベクトルに対し、空間のそれが全方位性を有する（しかも平面に縮減されている）と考えている点は興味深い。ハイデガーの「世界」概念は、アプリアリに「空間」とイコールと結ばれるものではないこと（むしろそれ自体は時間的であり、現存在の空間性によって支えられる）は先に述べたが、しかし逆に考えれば、この両者の緊張関係にこそ我々の存在（「ある」ということ）とその忘却に関わる核心があると考察を推し進めてみることはできる——しかも、ハイデガーはそれを重要な論点に上げている²⁰。

「現の開示態は、そのつど全体としてある世界—内—存在の全体を、すなわち世界と、内—存在と、《われあり》としてこの存在者である自己とを、同根源的に開示する。世界が開示されてあるとともに、いつもすでに、世界の内部の存在者が発見されている。用具的なものと客体的なものが発見されていることは、世界が開示されていることにもとづいている」（SZ：297）——この開示態としての、世界の世界性（第十八節）は、存在の「ある」という性格に対して、「あけひらく」「あけひらかれる」（SZ：75）様相を示し、用具（道具、あるいはそれを支える技術の）のネットワーク性によって成り立つ「環境世界（Umwelt）」たるその本質と現存在との間を、日常的配慮（配視）によってとりもつ配置をなす²¹。

さらに興味深い点は、この「世界」の視認性が、「像」を持つという表現に結びつくことにある。デリダは所謂ハイデガーの「転回」期にあたる1938年のテキスト『世界像の時代』に注目し、「像とは、まず全体性の表象ですが、しかしそれは再生産的な[模倣的な]表象以上のものであり、私たちがそれと交渉し、その観念をもち、それに専念させられている世界それ自体」（デリダ、p.181）であることを指摘する²²。さらにデリダはこの「世界像」の時代性（＝ひとつの時代（エポック）に属していること）を謂うが、まさにそのこと自体が、ハイデガーがフッサールから批判的に継承した「近代の再考」のモチベーションのあらわれでありかつ、その

「世界像」が危機に瀕した現代(1900年代前半)の学問状況に対する訴えであるといえるのだ。

「脱自」と「世界」

さて、こうした「世界像」が成立するには、「歴史」が本来的な機能を発揮しなくてはならないということになる。「歴史」の《根源》は時間性に求められる(SZ:375)ならば、そこには脱自態——すなわちアプリアリな自己から離れる投企の契機を見出さねばならない。ハイデガーは言う——「世界は三つの脱自態の《脱自》とともに《現=存する》」(SZ:365)。この「三つ」とは、過去、未来、そして(最も遅れてくるものとしての)現在である²³。しかしこれらは、単に時間を行き来するだけのことを意味してはいない。我々人間は、自己を指し示し「自らに自らを伝承する」位置として「脱自」するのである——デリダは言う、「自己から自己へのこの移行とは、歴史性の核をなす綜合を構成するものであり、本質的に言って第一の織物、第一のテキストであるものなのです」(デリダ、p.245)。

ここに至ってようやく我々は、ハイデガーを経由してイニスが仮定した「歴史=織物」「縦糸と横糸=時間と空間」という「通史」の原理の目論見が意味するところに到達した。それとともに、その核心にあるべき時間の「断片化」を、なぜイニスが問題視していた(『時間を弁護して』)のかについても、考察の入口に立つことができるようになった。

しかし(だからこそ)、ここからが本題である。ハイデガーやイニスは、「ラジオ」については各々の思考の範疇にとりいれることを意識してはいたが、テレビが「世界像」を表象する時代について言及するには至らなかった。対してマクルーハンはそのセンセーショナルな言葉によって、「機械」と「電子」は見た目どおり分節され、「空間と時間は消滅した」と断定する。さて、果たしてどうなのか——「世界-内-存在」と「現-存在」の本質的な関係が維持されているとするならば——「消えた」ものは何なのだろうか——その「未来」において、新しい技術(イマーシブとユニバーサル)は、どのような「世界像」を描くのだろうか。

5. 後期ハイデガーにおけるいくつかの概念補正—「技術」の位置

繰り返すが、ハイデガーは「時間、空間」を、実体をなすものとして捉えて論じてはいない。だが、主に彼が導入的分析の対象とした通俗的・日常的了解の「世界」において、それらは間違いない「実体」として立ち上がり、認識の界面において機能していた——特に、時間のメディア(時間的に編成・編集されるもの)としてのテレビ・新聞などのマスメディアにおいては、その「かたち」は新たな自明性として「支配」した²⁴。それが崩れた今日の状況は、考察を「二歩先」(テレビ→デジタル化)に進めねばならない。そのためには「世界像」という概念とともに彼が自覚した「時代性を、階梯に用いる」方法は許されるであろう。

『世界像の時代』が書かれた同じ頃、ハイデガーの第二の主著と言われる『哲学への寄与』の膨大な覚書が残された(1936-38と言われる)。『ハイデガー全集』の第二部門「講義録」の出版が終わってから刊行すべしという生前の指示によって、死後13年経った1989年になっ

てはじめて目に触れることになった本書は、人々に衝撃を与えた。最も大きな変化は、用語（特に「存在」の Sein→Seyn に代表される）に表れているが、そこにはもはやかつてのような方法で「存在（ある）」を問うことが困難になったというメタ認識が示されているといえよう²⁵。

その代わりに前景化された概念が“Ereignis”であり、邦訳では「性起」「呼び求める促し」「(固有化の)出来事」と表わされた²⁶。適切な日本語が見当たらないもどかしさはあるが、訳者たちの試行錯誤から、どうもハイデガー自身は、「存在＝ある」という静的な描写ではなく「立ち現れ、認識可能な領域に入り込む」動態としての表現を求めたのではないかと推測される。ハイデガーの思想に「転回」はあったのかという問題については、様々な論点が提起されうるが、本論との関わりでとりわけ重要な点はと言えば、「時間、空間」の論じ方が大きく変わったことをここでは指摘すべきであろう。

かつて『存在と時間』において、「空間」的な広がりや「時間」性を根拠に説明されていたが、『哲学への寄与』においては、「空間」は概念的に「時間」に還元されず（BP：377）、等価に位置づけられ（BP：192）、相互に結びついた「時－空」（*der Zeit-Raum*）概念に派生するものとして「底なしの深淵」たる本質が定位される（BP：387）。それに合わせ、開示（あけひらく）ことが強調されていた『存在と時間』に対し、『哲学への寄与』では「隠れ」「拒絶」「匿い」のようなネガの側面が強く意識されるようになった。とりわけ「瞬間」の動きに注意は傾けられ（BP：375）、そのコントラストのもとに、自我や真理が位置づけられるというように論理的な叙述の流れは大きく動的にシフトしている（この議論が、第五章「基づけ」の核心をなす）²⁷。

この変化は、「世界－内－存在」を位置づける「技術」の役割をも、前景化させることになった。ハイデガーの技術論は、所謂「後期」を代表するものとして取り上げられ、メディア論へのハイデガー援用の柱となっていた（『技術への問い』参照）。しかし、それらの多くの議論はそこで主張されている「集・立（*Ge-stell*）」概念に引き寄せられ、システム化されたテクノロジーに当てはめるところに止まってきた。しかし、これも『存在と時間』における「技術（*Technik*）」の位置づけ——その道具（用具）的機能存在からの変化を考えるならば、かつての「労働」色の強い文脈から視覚的あるいはコミュニケーション的な要素が強調され、「隠れ／現れ」を分岐させる役割に意味合いが広がっていったことは認めることができる²⁸。

『哲学への寄与』では、こうした新たな技術イメージが先取りされている。そしてそのことによって、「時間、空間」についても、かつての観念的なレベルでの読み解きから、それを踏まえつつも日常的な「実体」的なものに大きく接近した議論が展開される（第二章「響き」）。こうした中で経験から学問へと、ハイデガーが「知の復権」の構想を具体的に描いていた点は驚かされるが、その中でも特に「歴史」を学ぶことがジャーナリズムすなわち「新聞学問」へとアクチュアルな認識を広げている点は目を引く（BP：154、158）。まさにこの辺りに、イニスとの時代を捉える目の一致を見ることができ、イニスがやや悲観的に、当時の学問における「時間」に関する思惟の危機を訴えていること（「時間を弁護する」）とは対照的に、ハイデガーはむしろ積極的に科学的「実験」の可能性に言及しており、興味深い（BP：163）。

このコントラスト——すなわち時間と空間の認識の変化に関する「知」の動揺こそが、後年、マクルーハンらの目を奪う「メディアなるもの」の「実体」の出現と対応しているものと考え

てみたらどうだろう。デリダは「ハイデガーの思考の道が、それ自体、時代的(エポカル *époqual*)なもの、歴史的なもの、つまり隠喩的なものとしてみずからを提示している」(デリダ、p.308)と言う。故に「ハイデガー主義というものも、ハイデガー主義者というものもない」(p.309)——とするならば、まさにハイデガーのテキストは、理論であるとともに、その理論を再帰的に検証すべき対象として読むべきなのである²⁹。したがってこの「隠喩」の「時代性」の指摘は、我々の存在(「ある」ということ)のエポカルな本質が、ハイデガーそのものの「語り」の中に「隠され」沈められていることの証であるともいえるのだ。

そうだとするならば今度は、我々は(まだそのとば口に立つばかりであるが)イニスの補足をハイデガーへの照合に求めたように、ハイデガーの(特に『哲学への寄与』の)断章をして「メディア」に支えられる現代の我々の「存在の問い」につなぐアプローチと定め、それを手掛かりに、新たなるテキストを求める必要がある——本論はそれを「言語」と「公共性」の問題であると仮置きすることにしたい——なぜなら、これらがマクルーハンのフレームワークに交差する、いくつかの「別の」「メディア論」に流れ込む思想の核心であるからだ³⁰。

6. 「消えた」のは何か: 「ある」と「生きる」ということの間問い

『哲学への寄与』と「言葉」

1947年に書かれた『「ヒューマニズム」について』には、冒頭に「言葉は、存在の家である。言葉による住まいのうちに、人間は住むのである」というテーゼが「思索」との関係において示されている(p.18)。『存在と時間』の中においても、「人間は話をする存在者として姿を現わす」としている(SZ: 165)。しかしハイデガーはそのすぐ後で、それに言葉・言語に関わる学問的アプローチが、それまで「ロゴス」を基礎にしていたことを批判する——「われわれは言語学を所有しているが、それが主題にする存在者の存在は暗がりにつつまれている」(SZ: 166)

『存在と時間』において「言語」というカテゴリーは脇役に徹していたといってもよい。しかしそれは、あくまで旧来の言語使用の自明性に対して距離を置くためであり、むしろ逆に、さまざまな箇所・文脈で問題として取り上げられてはいる。大きく分けるとそれらは①物語るという行為の中にあるもの、それに対立する②問いかけ(呼びかける)——こたえる(応答する)という関係の中にあるもの、そして③それらがいずれも機能しない「非本来的」な日常の「頹落」の中にある「空談・世間話」のレベル——ハイデガーは、①から②への展開を目指す過程において③を発見した。そして敢えてその現象の分析に迂回することで、この時代(彼にとっての現代)固有の「存在」へのアプローチを試みたといえる。

言語そのものの様態を問うのではなく、それが道具・用具として指示関係を溶け込ませているパラダイム＝「世界－内－存在」とは何なのか——またそこに生まれる「親しみ」とその結果生まれる「忘却」——「現存在がこのように親しんでいるものは、何であるのか」(SZ: 76)を問う構え。それは、まるでその後の時代に現れる「語用論」「言語行為論」を核にした言語論的転回の論者たちを先取りするような眼差しに支えられている。しかし、ハイデガー自身

はそれを当面は主題化せずに、環境であるところの「世界」を問題にすることを優先し、その核心たる「現—存在」——さらにその本質を成す「現 (Da)」の時間性にどんどん問いを先鋭化していった。

しかしハイデガーの『存在と時間』の構想はその後断念され、またそれを刊行した直後に行った『現象学の根本問題』の講演における再構成の試みも頓挫、そして『哲学への寄与』も最終的には断章というかたちになり、さらに公開を禁じたという流れを顧みると、そこには先に進むことを躊躇わざるえない、何らかの大きな足枷があったようにも思われる——デリダは、自らの講義の最後において『存在の問いのために』(1955)で「存在」という語を「×印」で抹消したことを引き、その可能性＝言語学的に問うことの可能性を仄めかす(デリダ、p.311)。この時点のデリダはもちろん『哲学への寄与』を読んでいない。しかし、その最終節はまさに「言葉(281節)」なのだ。これはおそらく偶然ではない³¹。

ハイデガー自身はそこで、この断章群全体を束ねる概念である“Ereignis”と「言葉」を結びつけて、「開けた場」として提示する(BP:510)。まさに皮肉にも彼が「言語・言葉」の問題に逡巡しつづけたのは、この「開け」にこそあったのだといえよう。「世界」が「像」という開示態をもつことの根拠たる「あけひらかれ」が、現実には非本来的な日常における頹落の中に表れていることに彼は苦しんでいたのだ。それは、『存在と時間』における「開かれ(公開性)」と、メディアを論じる際に避けることができない「公共性」の問いの間の距離である——実際ハイデガーは、この二つの意味をほとんど区別していない³²。したがって、せっかく発見した日常における開示態による「あけひらかれ」はいかに公開的であっても「既成解釈」(SZ:273)「常識的な曖昧さ」(SZ:299)と一蹴されてしまう。そして現—存在の「瞬間」的「開かれ」を支える明示的・時計的な「公共的時間」(SZ:411)に期待を寄せるのである³³。

『現象学の根本問題』では、この時間規定の「公共性」に関して、「相互共同存在のうちでだけでも理解できるようになっている」とし、「時間性の脱自的地平的性格に基づいて」(p.437)ゆえに<今>の共有＝共通の世界—内—存在への展望が語られる。ある意味これは、この先訪れるマスメディアの「世界」への期待とも読める。しかし残念ながら、この時計的な時間にそった編成自体が瓦解してしまった今日のメディア環境に立った時、この辺りの記述は、もはや錆びついたものとの印象は否めない。

生き延びるための選択か

ヒューバート・ドレイファスは、そのことを(『存在と時間』の時点では)むしろ空間性の問題として、ハイデガーにおいては「存在者が人間存在に会われる場である公共的空間と、個別的な各々の人間に特有の、中心をそなえた空間性とがはっきり区別されなかった」(p.146)と批判的に補足を加える。しかしドレイファスの『世界内存在』は、その時間論的根拠性を敢えて捨象し、空間から世界のシステム化に向かって解釈を広げている点に、そもそもハイデガーの思索の道筋からの逸脱がある。

だが、それもある種の「歴史的(エポカル)」なテキストと読むならばまた、新たな価値が開かれるであろう。ドレイファス自身が告白しているように彼の『世界内存在』の講義草稿が書

かれたのは1970年代～85年にかけてであり(p.5)、『コンピュータには何ができないか』と並行して作業がなされていたことがわかる。その意味でドレイファスのハイデガー理解は、それ自体が、我々の「世界」において時間と空間の関係が大きく変わっていったテレビの時代の、「次の」ステップが接近していることの自認の表明でもある。しかし、この時代まだコンピュータが(インターネットによって実装される)表象を伴ったメディアとして立ち現れていなかったことを考えると、ドレイファスだけに2020年代の今日への理論的橋渡しの責任を負わせることはできない。

その点で言うならば、イニスと同じような位置づけで今後の作業としてハイデガーと重ね、検討の対象としてみたいのが、レフ・マノヴィッチ『ニューメディアの言語』である。マノヴィッチもイニス同様、ハイデガーに対する言及はない。しかしそこで中心をなすテーゼ：デジタル記号圏における「(連辞に対する)「範列の前景化」(p.326)、あるいは支配的パラダイムが「時間的モンタージュ」(p.228)から「空間的なモンタージュ」(p.233)、さらには「存在論的モンタージュ」「様式的モンタージュ」に転じていく様相を描こうとしている論理立てには連続性がある。しかもその核に「言語」概念を置き(p.49)、詩学を引用しつつ、表象概念への到達を目論む展開は、その実証性も相俟って読み応えがある。

しかしマノヴィッチにおいては、そこから先の「人間」に対する問いがどうも希薄である。あくまで「メディアの変化」の中に説明原理を求めているという点においては、マクルーハンののだと言ってもいいだろう。ハイデガーは、明らかにそこは異なる問題に向き合っていた。それは人間にとって抗いがたい「死」の不可避性とどう向き合うかという難問、すなわち「生きる」ことを含意した「存在への問い」である——『存在と時間』で時間が主題となり、その「解体」に微分的に向き合わざるを得なかったのは、それゆえのことなのである。しかしそれは同時に、ハイデガー自身の「息切れ」の原因でもあった。

時代的な現実は、どうもさらにその先に進んでしまったように思われる。2022年の「NHK技研公開」が見せてくれた「世界」は、「解体」されきった我々の20世紀的な(エポカルな)「存在(ある)」を「別の仕方」で再生させる試案に見えた——それは、映画の理論を下敷きに『ニューメディアの言語』を構想したマノヴィッチすら、追いついていない「世界」である。しかし、それはマクルーハンが受けを狙って言った「時間と空間の消滅」ではなく、むしろ生きられる「時一空」を引き延ばすために身体と言う起点を「隠す」環境世界の構築モデルではないのか。そこにはハイデガー的「技術(technik)」概念から、インフォメーション・テクノロジーの「実体化」を伴わない存在相互の結びつきへの飛躍がある。

「放送」という輪郭を与えられたメディア・カテゴリーが眼前から消えた理由は、この人間の「生」の次元における「技術」と「世界」の関係変化に求められる——本論はとりあえずそれを「メディアの原理論」を求める次の作業仮説に据えることで、締めくくることがしたい。

註

- 1 「放送と通信の融合」のスローガンが出て以降、「放送の終焉」が常に議論的的となっていた。筆者もこの技研公開の見学記を度々連載コラムやSNSに書いてきたが、実際に2016年、「放送は終わっ

- た」と呟いた翌年、「逆襲があるかも」と再び期待している。
- 2 技研公開 2022 サイト <https://www.nhk.or.jp/str/open2022/>。この URL「open2022」の年号部分を書き換えると 2017 年まで溯ることができる (2022 年 6 月 25 日現在)。
 - 3 2021 年 10 月 28 日、米国フェイスブック社は「Meta」に社名変更をしたことで話題となったが、まさにネットの主戦場のシフトを印象づける出来事だった。また 3rd Party Cookie の 2022 年の廃止など、ネット上のプライバシー管理に関する議論も大きく動いた。
 - 4 大学に「メディア研究」の拠点を求める声は、十九世紀末には高まり、最初のジャーナリズム学部は 1908 年のミズーリ大学、続いてコロンビア大学に 1912 年に修士課程が設けられる。その背景には産業としての新聞業界の急激な成長があり、人々の耳目を集める大量の事件、しかも複雑化する社会状況や多様な取材領域に対応できるタフな新聞記者を養成する「職業教育」が求められたことがある。
 - 5 1960～70 年代の彼ら (カルチュラル・スタディーズは、レイモンド・ウィリアムズやスチュアート・ホールに代表される) の仕事は、マス・コミュニケーション論から「メディア論」にフレームを組み替えるきっかけとなった。本論では紙幅の関係で後者の仕事に立ち入ることはできない。いずれ稿を改めてこの問題意識との関わりを論じたい。
 - 6 「マクルーハン理論」の源流としてのイニスの位置づけは、ポール・ヘイヤーらによるメディア理論の教科書的アンソロジーの編纂の仕事が大きな影響を与えている。クローリー+ヘイヤー『歴史のなかのコミュニケーション—メディア革命の社会文化史』(新曜社、1995)
 - 7 マクルーハンによる序文は (邦訳には注釈はないが)、イニス『メディアの文明史』(原題: *The Bias of Communication*) の初版にはなく、1964 年版になって付されたものである。
 - 8 マクルーハンは、イニスが「伝統と時間的連続性の価値に対する彼自身の深いこだわりのゆえに」ウインダム・ルイスを誤読した (p.14) とする。このあたりの一連の批判を見ると、むしろ可視性と可聴性の様式にこだわり、時間と空間の問題に踏み込めなかったのはマクルーハンのほうであると読める。彼の「神経系」論への自賛はこのあたりに現れる。
 - 9 その点で言えば、訳者久保秀幹が *The Bias of Communication* に『メディアの文明史』という邦題をつけたのも、少々マクルーハンに引き寄せられた勇み足であったのではないかと言う見方もできる。久保は同書あとがきにおいて media を文脈によって「媒体」と「メディア」に訳し分けたと述べてはいる。
 - 10 イニスは「メディア」という語を単独で用いることは少なく、その多くは「コミュニケーション」と言う語に添えられているか、「コミュニケーション」を語る文脈の中にある (第二論考「コミュニケーションの傾向性」冒頭 (p.77-79) など)。
 - 11 イニスは 1894 年生まれで 1952 年没、ハイデガーは 1889 年生まれで 1976 年没。研究者として生きた時代が重なる。ハイデガーの方が先に名声を博したが、イニスの主要文献を見てもハイデガーへの直接の言及はない。本論は故に系譜学的研究ではない。後述する意味で各々の「世界像」に関する推論である。
 - 12 第一論考「ミネルヴァの梟」が 1947 年カナダ学士院の議長講演、第二論考「コミュニケーションの傾向性」が 1949 年 4 月ミシガン大学の講演、第三論考「時間を弁護して」が 1950 年ニューブランズウィック大学での講演 (第四論考は不明) と書かれた時期が異なる。

- 13 (1)の例としてはハイデガーとヴィリリオの接続(和田伸一郎『存在論的メディア論』2004、新曜社)、(2)の例としてはハイデガーとマクルーハンの接続(合庭惇『ハイデガーとマクルーハン』2009、せりか書房)、(3)の例としては拙著の『閉じつつ開かれる世界』2004、勁草書房)が挙げられよう。また、安易な切り取りではなく、「技術論」をベースにハイデガーやデリダの構想自体を再考するふ厚い試みとしてはB.スティグラーの『技術と時間』があるが、今回は紙幅の限りがあり、その検討は別稿に譲る。
- 14 ここで白状するならば、本論は約20年前に書いた拙著のハイデガーに対する浅薄な理解をやり直したいというモチベーションに支えられている。
- 15 「内-存在は、空間的な意味で一方が他方の「なか」にあるという客体的関係を指すどころか、むしろ「内」はもともと決してそういう空間的関係を意味していないのである」(SZ:54)——ハイデガーはここで「住む」「もとにある」という表現を通じ、主体が「あとから移される」(SZ:56)形而上学的空間概念としての「世界」を否定する。
- 16 『存在と時間』という大著の目標とするところを、一言で表すのは難しいが、一番「端的である」と感じたのがこの山本英輔の一文である(「運命の時間-空間」『ハイデガー「哲学への寄与」解説』p.189)
- 17 木田元はこの認識にもとづき、『ハイデガー「存在と時間」の構築』(2000、岩波現代文庫)を試みる。しかしその手掛かりは『存在と時間』発刊直後に行われた『現象学の根本問題』に止まり、後述する『哲学への寄与』が契機となる「転回」、あるいは後期ハイデガーの思想との同一性と差異については十分顧慮されてはいない。
- 18 以降、本論ではデリダ『ハイデガー——存在の問いと歴史』(2020、白水社)とゲルヴェン『ハイデッガー「存在と時間」註解』(1970=2000、ちくま学芸文庫)を主たる「導きの糸」として『存在と時間』を読んでいく。
- 19 「ハイデッガーは、実存の日常的な解釈に暴力を加えなければならぬと主張する。しかしそれは日常的視点を勝手に拒否することではないのである。日常的視点は決して捨て去られるのではない。それは超越されるのである」——ゲルヴェン、p.369
- 20 「いまわれわれは覚悟性にいたって、現存在の——本来的なるがゆえに——もつとも根源的な真理性に到達したのである」(SZ:297)
- 21 ハイデガーのこうした抽象概念から動作や様態に引き戻すような「柔らかい表現」は、各々の語の語源に立ち返って意味を問い直すことを読む者に促す。後述の『哲学への寄与』においては、さらにそうした表現が多くなる。
- 22 ハイデガー自身の言葉によれば「世界像とは、本質的に解すれば、それゆえ、世界についてのひとつの像を意味するのではなくて、世界が像として捉えられていることをいうのです」『世界像の時代』(理想社全集版、p.29)——p.27~29において、その像の時代性が語られる。
- 23 ゲルヴェンは「実存の所在は現在ではなく未来がになっている」(p.380)「三つの脱自態の末っ子ともいうべき現在」(p.384)という。
- 24 放送・新聞などのマスメディアは伝達内容に時間が織り込まれているにとどまらず、明示的にその区切りが時間によって(番組、版などの概念で)線引きされている。これは発信の同時性によって

情報の共有＝公共性の一つの側面が担保される「技術の政治性」のあらわれといえる。特に地上波放送は戦後民主主義の要請とマッチした。

- 25 Da- Sein のハイフンもその一つ。『存在と時間』ではハイフンはいれなかった。本論では引用元の表記に従う以外は、「Da」を強調する意味で、ハイフンを用いる。
- 26 『ハイデガー「哲学への寄与」解説』p.16。創文社版全集 65 集では、専ら「性起」が用いられる
- 27 『哲学への寄与』239 節の「時－空」の記述の前に自己、真理といった、基礎づけ概念が検討されていることに注目したい。
- 28 合庭惇は「Ge-stell」という概念の中に、この両面性を見、『存在と時間』と『哲学への寄与』をつなぐ役割があることを説明する（『ハイデガーとマクルーハン』p.163-5）。『「ヒューマニズム」について』における渡邊二郎の解説（p.379-389）で示される後期の「存在」概念の広がりも参照
- 29 もちろんデリダが、『存在の問いと歴史』の講義をした頃、『哲学への寄与』は公開されていないが、デリダらフランスの研究者にとっては、1947 年に書かれた『「ヒューマニズム」について』の方がむしろ『存在と時間』よりも身近なテキストであり、その点で言うならば、十分、後期思想に対する理解に踏み込んでいたと考えられる。
- 30 当然、ここではハーバーマスのこと、カルチュラル・スタディーズのことが想起されるであろう。
- 31 先立つ 276 節「有（存在）と言葉」では、「言葉は、有に源を發し、それゆえ有に属す」（BP:538）と言う一方、言葉が「今なお象徴思想にはまったまま」（BP:540）であることを嘆く。
- 32 訳者によって、die öffentliche/ Öffentlichkeit の使い分けは極めてあいまいである。寿卓三（「ハイデガー存在論における「公共性（批判）」の広表」（Heidegger-Forum vol.3 2009）では明確に「公共的」として論じられている部分（sz:273）が、細谷貞雄訳（ちくま）では「公開的」となっている。
- 33 ゲルヴェンは「公共的時間とは、万人の役に立つ計測された時間のことである」（p.451）と言い、かつそれが可能になる前提、またそれが「次第に精密になると」「ここに人間の頹落があらわれて、その結果時間の解釈は、測定するものの方を時間解釈の鍵とするという風になる」ことを指摘する。これもまた 20 世紀的感性である。

参考文献

マルティン・ハイデガー（ハイデッガー）

『存在と時間』（上下）細谷貞雄訳、ちくま学芸文庫、1994 ※本文中の引用は SZ と表記（訳語については、岩波文庫版（熊野純彦訳、2013）、勁草書房版（松尾啓吉訳、1990・1992）を参照

『現象学の根本問題』木田元監訳、平田裕之、迫田健一訳、作品社、2010

『哲学への寄与』大橋良介、秋富克哉、ハルトムート・ブフナー訳、創文社（全集 65 巻）、2005 ※本文中の引用は BP と表記

『形而上学入門』川原栄峰訳、平凡社ライブラリー、1994

『「ヒューマニズム」について』渡邊二郎訳、ちくま学芸文庫、1997

『技術への問い』関口浩訳、平凡社、2009

『世界像の時代』桑木務訳、理想社（選集 13）、1962

『同一性と差異性』大江精志郎訳、理想社（選集 10）、1960

ハロルド・A・イニス

『メディアの文明史』久保秀幹訳、ちくま学芸文庫、2021

「古代帝国のメディア」デイヴィッド・クロリー、ポール・ヘイヤー編『歴史の中のコミュニケーション』所収、林進、大久保公雄訳、新曜社、1995

“*Changing Concepts of Time*” Rowman & Littlefield Publishers, Inc., 2004

合庭惇『ハイデガーとマクルーハン—技術とメディアへの問い』せりか書房、2009

池田喬『ハイデガー「存在と時間」を解き明かす』NHK 出版、2021

鹿島徹、相楽勉、佐藤優子、関口浩、山本英輔、N.P.リーダーバッハ『ハイデガー「哲学への寄与」解説』平凡社、2006

加藤尚武『ハイデガーの技術論』理想社、2006

木田元『ハイデガー「存在と時間」の構築』岩波現代文庫、2000

マイケル・ゲルヴェン『ハイデガー「存在と時間」註解』長谷川西涯訳、ちくま学芸文庫、2000

ジャック・デリダ『ハイデガー—存在の問いと歴史』亀井大輔、加藤恵介、長坂真澄訳、白水社、2020

ヒューバート・L・ドレイファス『世界内存在—「存在と時間」における日常性の解釈学』門脇俊介監訳、榊原哲也、貫成人、森一郎、轟孝夫訳、産業図書、2000

中澤豊『哲学者マクルーハン 知の抗争史としてのメディア論』講談社、2019

ジョージ・マイアソン『ハイデガーとハーバースと携帯電話』武田ちあき訳、岩波書店、2004

マーシャル・マクルーハン『メディア論—人間拡張の諸相』栗原裕、河本仲聖訳、みすず書房、1987

マーシャル・マクルーハン、エドモンド・カーペンター『マクルーハン理論—電子メディアの可能性』大前正臣、後藤和彦訳、平凡社、2003

レフ・マノヴィッチ『ニューメディアの言語—デジタル時代のアート、デザイン、映画』堀潤之訳、みすず書房、2013

水島久光『閉じつつ開かれる世界—メディア研究の方法序説』勁草書房、2004

峰尾公也『ハイデガーと時間性の哲学—根源・派生・媒介』溪水社、2019

和田伸一郎『存在論的メディア論—ハイデガーとヴィリリオ』新曜社、2004

Robert. E. Babe. *Wilbur Shramm & Noam Chomsky Meet Harold Innis : Media, Power, and Democracy.* Lexington Books., 2015

Paul Heyer. *Harold Innis.* Rowman & Littlefield Publishers, Inc., 2004